

感動が連続、大満足の北陸旅行

代表取締役社長
右城 猛(1986年入社)

1. はじめに

北陸は私にとって思いで深い地域である。1983年に金沢で「落石の衝撃力およびロックシェッドの設計に関するシンポジウム」があった。このとき、懂れていた吉田博先生(当時は金沢大学教授)と一緒にツーショット写真を撮らせていただいた。私が33歳のときである。

吉田先生とは40年間経った今でも懇意にさせてもらっている。先生との関係で石川県と富山県にはたびたび足を運ぶ機会があった。しかしながら、富山市と高岡市についてはなぜか訪問する機会がなかった。何度も来ている金沢でも初めて経験する場所があった。この旅行で私の心に強く刻まれた見学場所や出来事を紹介させていただく。

2. 「まず寿司」

最初の見学場所「まずのすし本舗・源」は、富山空港から10分の距離にあった。源が「まずのすし」の販売を開始したのは1912年。110年の伝統を持つ老舗企業である。

昼食後、レストランに併設された「まずのすしミュージアム」を見学した。中川一政画伯が描いた「まずのすし」のパッケージが目にとまった。どこかで見た記憶がある。40年前に金沢大学で開催されたシンポジウムで研究発表をした帰りの列車「雷鳥」の中で食べた駅弁が「まず寿司」であった。中川画伯のパッケージを見たのがその時であったのか、その後であったのかは定かでないが、笹の葉に包まれて樽に入った「まず寿司」の旨さに感動したことは、今でも鮮明に覚えている。



写真1 中川一政画伯が描いたまずのすしのパッケージ

3. 富岩運河環水公園

世界一美しいスタバ

富岩運河環水公園に「スターバックス」がある。2008年の社内コンテストで最優秀賞を受賞したことから「世界一美しいスタバ」と言われるようになったようである。



写真2 スターバックスコーヒー富山環水公園店



写真3 テラスでコーヒーを飲む。背後は天門橋

天門橋から眺めると、スタバの背後に立山連峰が見えた。世界一美しい景色であることに納得した。

いつもは観光客で溢れ、長蛇の列ができていたようであるが、数名の客とわが社の社員が並んでいるだけであった。木曜日の14時45分は、たまたま空いた時間帯であったのかも知れない。テラスでアイスコーヒーを飲んだ。高知のスタバのコーヒーよりも格段に美味しく感じた。

富岩運河と中島閘門

富岩運河は、富山港から湊入船町までをつなぐ延長5.1kmの閘門式運河である。富山市と当時の東岩瀬町の両市町をつなぐことから富岩運河(ふがんうんが)と名付けられている。

定員55名のソーラー・クルーズ船が二艘運行されていた。クルーズ船に乗って2kmほど下ると国指定重要文化財の中島閘門があった。閘門はパナマ運河方式で、マイターゲート(合掌式ゲート)の上流扉と下流扉で構成され、約2.5mの水位差を門扉横の通水孔で調整している。閘室は長さ60m、幅9m、深さ6.3mである。運河の開削にあわせて1934年に設置されたものである。

パナマ運河方式は、レオナルド・ダ・ヴィンチの考案である。彼の手書きノート「アトランティコ手稿」にミラノ運河サンマルコ閘門を設計したデッサンが描かれている。「モナリザ」「最後の晩餐」などを描いたルネサンス期を代表する天才画家であることは誰もが知っている。ダ・ヴィンチは天才土木技術者でもあったのである。

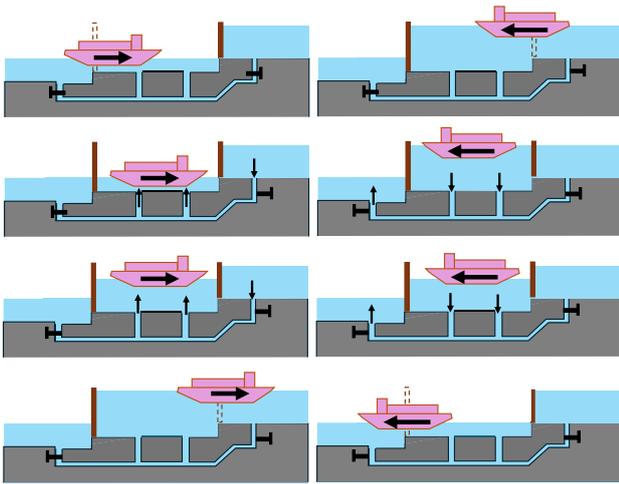


図1 中島閘門の仕組み(著者による)



写真4 下流側から眺めた中島閘門

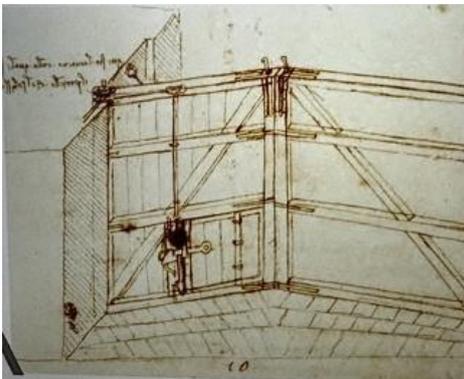


図2 ダ・ヴィンチがデッサンした閘門

4. ホテル周辺を散策

1日目の宿泊は「富山マンテンホテル」であった。早朝の6時から1時間ほどホテルの北側にある「松川べり彫刻公園」と「城址(しろあと)公園」を家内と一緒に散策した。

松川のへりには、あちらこちらに彫刻が設置されていた。富山市が芸術の町であるという印象を強く感じた。松川沿いの道路に、「地震で壊れた道路をなおしています」という立て看板が設置され、舗装工事が行われていた。元旦の能登半島地震で地盤が液状化したのだろう。

松川が国道41号(城址大通り)と交差する地点の手前に、壮大なアトリウム屋根と展望塔のある建物があった。富山市庁舎である。無料で一般開放されている展望台に上ると、立山連峰と富山市街を一望できるようである。このことをFacebookに載せると、国土交通省から出向している副市長



写真5 城址大通りのフラワーハンギングバスケット

の美濃部雄人氏から「今、市役所の5Fにいます」というメッセージが入った。

城址大通りの西側にも立派なビルが建っていた。富山県庁舎である。

城址大通りは、並木のある中央分離帯を挟んで片側3車線の広い道路である。道路の両側にはフラワーハンギングバスケットが設置され、まるでヨーロッパに来ているようであった。有料の自転車貸し出しステーションもあった。市内中心部の23カ所に設置されており、24時間自転車をレンタルできるようである。

城址大通りの西側には、城址公園が整備されていた。公園の中にお城の姿をした建物があった。富山市郷土博物館である。富山市街は1945年8月の空襲で壊滅的な被害を受けている。震災復興事業完了を祝って富山産業大博覧会が開催されたときに、記念事業として建設されたようである。

2002年から連続5期、富山市の市長を務められた森雅志氏が、「交通政策は医療、福祉、教育、産業振興の全てにつながる」という理念で、強力なリーダーシップを発揮して「公共交通を軸とした拠点集中型のコンパクトシティづくり」を推進してきた。その結果、市中心部は人口が増え、にぎわいが生まれている。

5. 梶原製作所

高岡市では高岡大仏と鋳物資料館だけの見学予定であったが、梶原製作所を追加してもらった。梶原製作所には廣井勇の銅像を造ってもらっている。2021年3月25日に完成した銅像が池川町の太野良一先生のアトリエに運ばれてきたとき、私は梶原寿治社長に一度だけお会いした。

大野先生は坂本龍馬記念館の「シェイクハンド龍馬像」、オーテピアの「寺田寅彦像」、佐川町の「廣井勇像」と「牧野富太郎胸像」の原型を製作されているが、その鋳造と仕上げはすべて梶原製作所が担当している。

高岡に行く機会があれば、梶原製作所を見学したいものだと思っていた。大野先生に電話すると、すぐ梶原社長と連絡をとってくれた。教えてもらった梶原社長の携帯に電話をかけ私の要望を話すと快諾してくれた。



写真6 製作所の説明をしてくれる梶原寿治社長

高岡大仏には10時に行くと社長に伝えてあったが、新湊大橋を出発したのが9時50分であったため到着したのは10時15分になっていた。高知空港を出発するとき添乗員には話してあったのだが、高岡大仏までの所要時間をバスガイドに確認し、新湊大橋の出発時間を事前にはっきりさせておくべきであった。確認がいまひとつ足らなかったことを深く反省している。

高岡大仏に到着すると、梶原社長がパンフレット30部を用意して待っていてくれ、高岡大仏の歴史や梶原製作所が担当している修繕について詳しく説明してくれた。

その後、梶原製作所を見学させていただいた。日本の銅器の90%は高岡で製作している。高岡銅器協同組合には44社が加盟しており、各社が分業して効率よく作業をしているのであるが、大きな銅器は分業が難しいことから、梶原製作所が一手に引き受けているとようである。高知県ではアンパンマンミュージアムにある高さ7mの「ジャイアントただんだん」や高知城公園にある「山内一豊像」も梶原製作所が手がけている。

山内一豊像は1913年に高知開市300年を記念して建立されていたが、太平洋戦争の金属供出で1944年に取り壊されていた。現在の銅像は1996年に、18代目当主山内豊秋氏に依頼されて梶原製作所が製作したものである。一豊の資料が残されていなかったため、豊秋氏の写真を見て製作したため、一豊の顔は豊秋氏の顔になっているという逸話を聞くことができた。

工場にはたくさんの銅像が置かれ、仕上げ作業が行われていた。その中に巨大な銅像が一体あった。高知市内の会社の倉庫で眠っていた親鸞聖人像で、修理中であった。

梶原製作所は1902年創業の老舗企業である。120年の伝統を守りつつも、鑄造する銅合金の成分となる銅、スズ、亜鉛の配合を微妙に変えているようである。これは企業秘密であり誰にも教えられないということであった。近年は材料が高騰しており、経営が苦しいということも話されて

いた。

この後、高岡市鑄物資料館や伝統的建造物保存地区の金屋町を見学する予定であったが時間がなく、昼食をする氷見漁港場外市場に直行した。

6. 金沢ひがし茶屋街

金沢市街を北西から南東方向に浅野川が流れており、右岸側に「ひがし茶屋街」がある。左岸側には「にし茶屋街」と「主計町(かえずまち)茶屋街」がある。

私たちが観光したのは、出格子(でこうし)のある建物が軒を並べた「ひがし茶屋街」であった。出格子の代表的なものが木虫籠(きむすこ)である。格子が一本ごとに台形の形状になっており、内側にむけて少しすぼませることで、外からは中が見えず中からは外が見えるマジックミラーのような不思議な効果を生み出している。

茶屋「懷華楼(かいかりう)」に入り見学する。1820年に建築された金沢で一番大きな茶屋で、金沢市指定保存建造物になっている。1階のカフェで名物の「黄金くずきり」を食べた。私が座った場所の床は透明ガラスになっており、地下室があるのが見えた。遊びに来た旦那衆が、顔を合わせたくない人を見たときに隠れる所かと尋ねたら、冷蔵庫の代わりにする雪室(ゆきむろ)とのことであった。南国高知では想像もできないが、雪国ではこのような雪室を備えた建物があったのだろう。

ひがし茶屋街の茶屋には、「一見さんお断り」のしきたりがある。特別な人の紹介がない限り中にはいることはできない。

20年近く前に、金沢に本社がある株式会社フォーテックの後藤幸三社長に連れて行ってもらったことがある。大きなアカマツが建物を貫いて生えていたこと、純和風のカウンター席に後藤社長と並んで座ってご馳走になったことを覚えている。

ひがし茶屋街には観光で何度も来ているが、マツの木のある茶屋を目にすることはなかった。この旅行記を書いて気になってネットで検索すると、「茶屋パー 藤とし」という店が見つかった。なんと今回見学した懷華楼と同じ通りに面しており20mしか離れていない距離にあった。



写真7 マジックミラーのような木虫籠

7. 成巽閣

兼六園に隣接した成巽閣(せいそんかく)は、1863年に建造された柿(こけら)葺き屋根の木造二階建て書院造りである。国の重要文化財に指定されている。

1階には10室以上の部屋がある。各部屋の間仕切りに土壁は使用せず戸、障子だけ。全部外して大広間として使えるようになっている。つくしの縁は縁側の長さが20mあるが、柱は1本もない。桔木(はねぎ)によって軒を支える構造にすることで開放的な空間を醸し出している。ゆったりとした気分で庭を眺められる。築160年経ち耐震壁がないにも関わらず今年の能登半島地震に耐えている。

4月に地震被害調査に行ったとき、茅葺き屋根の古民家を見かけたが、地震で倒壊したものは一軒もなかった。愛媛大学の森伸一郎先生も同様なコメントをFacebookに書かれていた。伝統的な日本建築は屋根が軽く、耐震性に優れているのかも知れない。

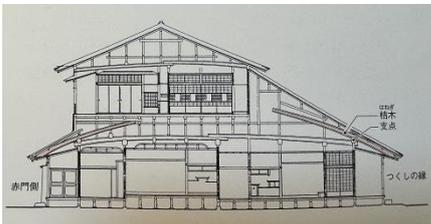


図3 成巽閣の構造(パンフレットによる)



写真8 縁側の長さが20mあるつくしの縁

8. はし拳

2日目の夜は、能登半島地震災害調査で金沢に出張して来ている道路交通課の中平君、仲田君、調査測量課の高橋君の3名が私たちに会いに来てくれたので、JTBの添乗員2人に案内してもらって二次会に行った。

添乗員も含め13名、誰も高知の代表的なお座敷遊びである「はし拳」を知らないというので実演して教えてあげた。私たちが幼少の頃には、お客(宴会)が宴たけなわになると決まって男達が「はし拳」を始めた。何度も見ているので自然と覚えた。土佐の文化を絶やしてはいけない。

9. おわりに

満足する旅行の3要素は、天気、料理、宿泊施設だといわれる。今回の旅行は3要素とも満点であった。

3日間とも好天に恵まれた。富山空港から昼食会場へ向かう途中に立山連峰の雄姿が現れ、感動させられた。



写真9 二次会の最後に記念撮影



写真10 小松空港から羽田空港に向かうANA756便の窓の外に首都高速のレインボーブリッジが見えた。この景色にも感動。

料理はどこも富山湾で捕れた新鮮な海鮮料理がメインであった。1日目の夕食は「鯛屋」。生け簀で泳いでいた新鮮な魚が料理に出た。旨さと量の多さに感動した。2日目は「底曳き割烹もんぜん」。前菜、お刺身盛り合わせ、能登牛せいろ蒸し、のどぐる塩焼き、はず蒸し、天ぷら盛り合わせ、にぎり寿司、デザートと豪華であった。糖尿病の身であることを忘れてつい食べ過ぎてしまった。

最終日の近江町市場では、能登牛炙り寿司、巨大な岩牡蠣、ボタンエビ、ウニを食べた。感動する旨さであった。市場で甘エビとヤリイカを買って宅配便で自宅に送り、翌日、醤油を掛けて生で食べた。甘くて美味しかった。

宿泊は富山、金沢ともマンテンホテルであった。大浴場があり、そこのラジウム温泉に浸かって旅の疲れをとることができた。

昨年の旅行はカナダであった。カナダと比較して日本の料理と宿泊施設のトイレとバスはずば抜けている、「なんて日本は素晴らしい国なんだろう」と思った。

旅行の3要素の一つ加えるとすれば同行者。同行者にも恵まれた。今回の旅行では新入社員8人全員が同じ3班であった。食事のときには新入社員が私の周りに座り、「社長は20代に何をしていたか」「成功するには何が大切か」などの質問を積極的に投げかけてきた。私の経験を踏まえ20代でやるべき大事なことや、私の夢を伝えることができた。私は旅行出発の前日に74歳を迎えた。人生のゴールが見えてきた。未来を担う若者に私が経験したことを伝えるのが、今の私の果たすべきことだと思っている。

感動が連続した大満足の旅行であった。北陸の素晴らしさ、日本の良さを実感する旅行でもあった。